

Pre-TOEFLの結果を通して見た 神奈川大学学生の短期英語研修の成果

橋 本 光 憲

はじめに

一、研修の目的

英語研修と異文化体験を通して英語の理解力、表現力を高めると共にアメリカ社会と文化に対する理解を深め、個性の函養、視野の拡大、国際感覚の育成および人格の陶冶をねらいとする。

二、研修の場所

州立カンザス大学応用英語センター (The University of Kansas - The Applied English Center)

本稿は一九九二年冬季に実施した神奈川大学学生の米国カンザス大学短期留学による英語研修の成果を、出発前および帰国後に実施したPre-TOEFL (TOEFLの簡略版)の結果を通して検証しようとするものである。

カンザス大学短期英語研修の内容

この研修の概要を一九九一年実施の第一回平塚キャンパス学生派遣プログラム(経営学部・理学部対象)では、次のようにその内容を説明している。

州立カンザス大学は合計三十の学位を与え、学生数二万八千名を有する総合大学であり、アメリカの中西部のトップレベル大学のひとつである。キャン

パスはカンザス州ローレンス市に位置し、治安・生活・環境の面でも恵まれた所である。ローレンス市と平塚市との間で平成二年秋、姉妹都市の調印が結ばれた。州立カンザス大学と神大との関係は交換留学等を通じて今後ますます深くなる。

応用英語センター(AEC)については後述。

三、研修の内容

期間……約四週間、他に冬休み一週間

内容……一日三時限(各六十分)、週五日

スピーキング、リーディング、ライティング、

……三時間、二十一日間計六十三時間

他に、米国社会事情を原則として毎日六十分

〜九十分

指導教員……AEC所属教員

四、その他

滞在先……大学寮(アメリカ人のルームメイト)

募集人員……三十名以内

コーディネーター……本学教員二名程度が付添い

単位認定……対応する本学英語科目の単位を認定

なお、参考までであるが、平塚キャンパスではこの他夏季に米国ノース・ダコタ(英語)、中国・上海(中国語)の短期留学研修を実施している。

Pre-TOEFLの実施について

研修参加者が二十名を上廻る場合には英語研修を二クラスに分けて実施するとの両大学間の合意に基き、一九九一年冬の第一回では独自に問題を作成して試験を行ったが、クラス分けは到着後のAECのテストに任せられた。

一九九二年の第二回では作問負担の軽減とテストにより客観性を持たせることを考えて、出発前の事前研修(オリエンテーション)の一環としてPRE-TOEFL(TOEFLの簡略版、正確には簡易版)を参加申込者に受験させたのである。

TOEFL(トウフル、Test of English as a Foreign Language)は「外国語としての英語試験」であり、一九六一年に誕生して以来、世界各地で実施されている。アメリカ、カナダの大学、大学院入学に当っては大学でおおよそ五〇〇〜五五〇点、大学院で五五〇〜六〇〇点の得点が必要される。中にはそれ以上のスコアを要求するところがある日本でもよく知られた試験である。

Pre-TOEFL(プレ・トウフル)は、TOEFLが六七

七点満点、受験者の平均点が五一八点であるのに対して、五〇〇点満点、平均点三九〇点と英語能力の中・下位者に向いている。問題はTOEFLほどは難しくなく、中・下位者にはより理解しやすく、当てづっぽうの解答をする必要が少なく、より客観的な結果が得られるという利点がある。試験時間はTOEFLが一〇五分であるのに対して、PRE-TOEFLは七十分である。

TOEFLの問題作成、採点は米国政府の委託を受けた Educational Testing Service (ETS—米国ニュージャージー州プリンストン所在)で行われる。Pre-TOEFLの作問も同じくETSで行われるが、採点は日本の場合は日本のTOEFL事務所(国際教育交換協議会東京事務所 TOEFL 事業部)で行われる。Pre-TOEFLの難点は、まだ普及度が不十分なため年間回数程度に受験機会が限られることである。

正確なPRE-TOEFLの名前は、Level 2-TOEFLまたは The Preliminary Test of English as a Foreign Language であり、プレ・トーフルは通称であるが、英語でも、Pre-TOEFLといった方が理解されやすい。プレ・トーフルは Intensive English course (英語集中講座) などの language programs (の placement (クラス分け) と研修実施後の progress (進歩の度合) の確認に適しているといわれる。

内容は TOEFL と同じく、

Section I Listening Comprehension (ヒアリング)

二十二分—五十問

Section II Structure and Written Expression

(文法と誤文訂正) 十七分—四十問

Section III Reading Comprehension and Vocabulary

(長文読解と語彙) 三十一分—六十問

であり、解答はマークシート方式で、日本のTOEFL事務所に送ると、二週間以内に結果が還元される。(個人別、学籍番号順一覧表、成績上位順一覧表など)

Pre-TOEFL実施結果の比較

さて、Pre-TOEFLの実施マニュアルやテスト問題は原則的に非公開とされているので、これ以上の説明は難しい。また、帰国後のPre-TOEFL実施結果は The Applied English Center の研修結果をふまえて説明すべきであるが、便宜的にまず結果を先に示すことにする。

なお、テスト受験者は試験実施前に Examinee Handbook (and Admission Form) を入手して、受験要領を理解し練習問題 (Practice Questions—Example)

を自習することができるようになっている。

ここで断っておかないといけないのは、Pre-TOEFLの採点方法である。別表の中でセクション別（Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ）の得点の中に50点のものがいるが、これは決して満点ということではない。Ⅰ（ヒアリング）では三十問中正解がゼロでも27点、ミスが五問あっても50点の得点が取れるようになっていて、ヒアリングの場合は少し理解できるまでも時間がかるから、基礎点が高くなっている。

Ⅱ（文法と誤文訂正）では二十五問中正解がゼロでも23点、ミスが一問あっても50点取れる。Ⅲ（長文読解と語彙）では四十問中正解がゼロでも22点、ミスが四問あっても50点取れる。この採点スケールはTOEFLにも共通する考え方である。

神奈川大学とカンザス大学の交流協定はその後横浜キャンパスを含めた全学部対象の協定となり、一九九二年の第二回は参加人員二十四名中、経営学部学生は男子十名、女子七名の合計十七名であった。（別表の学生欄の※印）他学部学生については参加人員が限られていて、学部名を示すと個人のプライバシーを侵しかねないのので、二回のPre-TOEFL実施結果の学部別分析は経営学部学生に限定した。

出発前テスト実施日 一九九一年十二月二十日

オリエンテーション

英会話、渡航、キャンパス生活、ホームステイの注意を含めて八回程度

旅行期間 一九九二年二月十六日～三月二十九日

うち研修期間 実質四週間（二十三日）

帰国後テスト実施日 一九九二年四月三日

四週間程度の短期英語研修（授業時間数 六十三時間）という限界はあるが、語学留学ということでそれに加えられた収穫も期待できる。また、英語研修の内容と学生の受講状況なども検討しなければ、研修成績（評価）との相関性も正しく論ずることができない。テスト自身もどれだけ正確にそれらの成果を反映できるかという問題もあるが、それらをすべて捨象して、ひとまずはテスト結果を観察してみよう。

なお、Pre-TOEFLの信頼度はSection Iで76%、Section IIで88%、Section IIIで85%ではあるが、全体では91%と高いとされている。そして、全体での誤差は12・4点である。したがって、個人別には12点前後の上下には特にこだわらなくていいのであるが、ここでは一応点数を素直に受けとることとしよう。

一、全体の得点の上下

(1) 合計点で四〇六点であったものが、四二二点と一六点上昇したのは、受講の成果があったといえる。なお、本テストの受験者の平均得点は三九〇点であるから、神奈川大学生は平均比三二二点（受講終了後で）高い実力を持っていることになる。

(2) 経営学部学生十七名は、平均三九七点であったものが、四一二点へと一五点上昇した。

非経営学部学生七名は、平均四二七点と経営学部学生よりも高かった。帰国時点では四四三点と一六点の上昇であった。

二、グループ別の得点の上下

(1) 「上」グループは、平均四三九点であったものが、帰国時点では四五五点と一六点の上昇であった。

(2) 「中」グループは、平均三七三点と本テストの受験者の平均得点三九〇点比やや低かったが、帰国時点では三八九点と一六点上昇し、全受験者平均と殆ど同じまで向上した。

三、個人別得点とAEC研修評価との相関性

(1) 「上」グループ

Aはすでに高位にあり、研修評価もAと良かった。

Bはかなりの上昇を示したが、米国社会事情を含めたAECの評価は今一歩であった。

Cは三〇点上昇と進歩が見られ、AEC評価も良好。Dは得点上昇、AEC評価も良好。

Eは四三点上昇と伸びが大きい。AEC評価も良好。

Fは二三点の下降。AEC評価はまずまず。

Gは得点にあまり変化なし。AEC評価は良好。

Hは得点は若干上昇。AEC評価は良好。

Iは得点が多少低下。AEC評価も今一歩であった。

Jは得点上昇、AEC評価もまずまず。

Kは六〇点上昇と受講者中最高の伸びで、AEC評価もAと良かった。

Lは得点もかなり上昇し、AEC評価も良好。

グループ十二名中で得点下降者は二名であった。

(2) 「中」グループ

Mは得点は若干上昇したが、AEC評価は今一歩。

Nは得点が多少上昇、AEC評価も良好。

Oは三〇点の上昇、AEC評価も良好。

Pは得点が多少低下、AEC評価も今一歩であった。

Qは三四点の上昇と進歩が認められ、AEC評価も良好であった。

Rは得点は若干上昇。AEC評価は良好。

Sは四七点上昇と「中」グループで最高の伸びで、全体でも二位の伸び。AEC評価も良好であった。

Tは二三点の下降であるが、AEC評価は良好であつ

P※	O※	N※	M	L※	K※	J	I※	H	G※	F※	E※	D	C	B※	A		学生
40	40	40	40	41	43	45	43	36	45	41	44	50	43	48	50	I	プレ・トリフル (出発前)
39	39	40	42	41	40	40	40	50	42	50	48	42	50	44	46	II	
36	37	39	38	41	42	41	44	43	42	42	42	42	42	47	50	III	
383	387	397	400	410	417	420	423	430	430	443	447	447	450	463	487	合計	
39	39	41	38	48	43	41	41	45	42	42	50	47	47	45	48	I	プレ・トリフル (帰国後)
36	41	42	44	41	50	46	41	42	41	44	49	46	49	49	50	II	
36	45	40	40	41	50	43	42	46	47	40	48	46	48	50	49	III	
370	417	410	407	433	477	433	413	443	433	420	490	463	480	480	490	合計	
-13	+30	+13	+ 7	+23	+60	+13	-10	+13	+ 3	-23	+43	+16	+30	+17	+ 2	上下	合計点
中	中	中	中	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	グループ	
B -	A -	A -	B -	B +	A	B +	B -	A -	B +	B	B +	A -	A -	B -	A	評価	AEC

※印 (注) I ヒアリング、II 文法、III リーディング
経営学部学生

X※	W※	V	U※	T※	S※	R※	Q※
36	36	33	37	37	42	44	36
34	35	36	38	40	36	33	38
31	35	38	34	34	34	35	41
337	353	357	363	370	373	373	383
40	37	39	36	36	46	42	46
33	36	41	36	34	41	36	39
37	40	37	36	34	39	36	40
367	377	390	360	347	420	380	417
+30	+24	+33	- 3	-23	+47	+ 7	+34
中	中	中	中	中	中	中	中
B	B +	A	B +	B +	A -	A -	A -

た。
Uは得点にあまり変化はなし。AEC評価は良好。
Vは三三点上昇と進歩が認められ、AEC評価はAと良かった。
Wは二四点上昇。AEC評価は良好。
Xは三〇点上昇。AEC評価はまずまず。
グループ十二名中で得点下降者は三名であった。
両グループを通じて個人別得点の上下とAEC研修評価の相関度はかなり高いことが認められる。

The Applied English Center (AEC) の研修内容

AECはこのプログラムの内容を、当大学生のための

(1) intensive English study

(2) cultural enrichment activities

であると説明している。

コース・スケジュールは三時間の教室内の英語技量 (reading, writing, speaking and understanding) — 英語構文の使い方の練習を土、日を除き毎日実施する。それと毎週四時間半を American Society (米国社会) をテーマに一時間半をゲストの講演に当て、残り三時間は講義・討論に当てる。

残りの一時間半は exchanges (意見交換—カンザス大 学生、大学院生、教員、中高生、ビジネスマン、研究所員などと) または field trip (現場見学—地元企業、工場、研究所など) に当てるものである。

AECは、この他に学生寮への入居(極力アメリカ人のルームメイトを探す)も担当している。学生寮は先方の春休み(一九九二年の場合は三月七日から十四日)の間閉鎖されるので、その間小旅行、ホームステイ等を入れたが、明年は春休み期間が繰下げられるので、研修期間を繰上げて春休み前に終了するよう変更する予定である。

おわりに

以上により四週間程度の短期英語研修でも現地留学はそれなりの効果があることが認められ、新カリキュラムにおける在外学習—海外実習の意義を語学研修の面では検証できたと思われる。

なお、Pre-TOEFLは今回試験的に実施したが、費用(一人一回二、二六〇円)、手間を考え、今後はAEC側提供の問題による事前テスト(クラス別け資料を兼ねる)の実施に変更する予定である。

(はしもと・みつのり/経営学部助教授)